

# 正論

で、江沢民・中国共産党総書記、李鵬首相らが出席した全国対台湾工作会議が開かれ、中国側の責任者(党中央対台湾工作指導小組組長)楊尚昆・国家主席が重要講話をおこなって、中国の当面の台湾政策が包括的に打ちだされたことである。中国側は、香港、マカオが返される一九九〇年代、「一祖国統一事業の重要な時期」だと位置づけ、硬軟両様の立場から対台

海峽はさんで重要な動き  
湾岸戦争が終わってみると、わが国のすぐ近くに、いったん緩急あれば、その重大性はペルシヤ湾の比ではない台湾海峡をはさんで、このところきわめて重要な一連の動きがあったことに気づかされる。

その一つは、昨年十二月の中国

湾工作を積極的に推し進めることを決定している。

一方、台湾側では、同じ時期に

東京外語大教授 中嶋 嶺雄

## 中国敵視条項の廃止の重さ

李登輝総統の指導下で開かれた総統府諮問機関・国家統一委員会が提案した「国家統一綱領草案」が

去る二月下旬に採択され、民主・自由・均富に基づく中国の統一という、まさに、現代の三民主義の方針を打ちだしたことである。台湾側はさらに、この四月二十二日、台北で開かれている国民大会

### 注目される台湾問題の進展

臨時大会で一九四八年以来憲法の付属条項として定められていた「動員戡乱時期臨時條款」(中国共産党を敵視した条項)を廃止し、中台関係に歴史的転機が画されることになった。

このような措置は、内政・外交上も著しい進展をみせつつある台湾側の自信のあらわれであろうが、しかも李登輝総統は三月四日、長いあいだ台湾内部を引き裂いてきた歴史的な出来事である「二・二八事件」(一九四七年の外省人による本省人鎮圧事件)の真相調査と犠牲者への処置という画期的な方針を示し、台湾内部の心理的亀裂を修復する重要な第一歩を刻んだのであった。

中国にあせりといらだち  
こうした台湾側の着実な政治的

足りのは、周知のような台湾経済の世界的地位の確立とともに、中国側のあせりといらだちを促していることは否めない。去る一月二十八日、中国共産党が極秘に伝達したという内部文件「対台湾工作

をより一層強めることについての通知」に見られる先の楊尚昆講話によれば、「全体的な情勢は平和的統一の方向の発展にとつて有利であり、党中央の対台湾方針・政策の正しさを実践が証明している」というが、いわゆる「台湾経験」(台湾の経済的・社会的成功の経験の大陸への伝達)や「弾性外交」(外交関係がなくても実務的な二国間の関係を強化する政策)にはきわめて警戒的であり、また依然として

ずこくなる傾向に対しては、「反浸透、反腐食」の工作を強化すべきことをうたっている。昨年一年間に台湾から大陸へ渡った民衆は約百万人にものぼるとみられているが、これらの交流によって物心両面から台湾の影響が及ぶことによつて生ずる「台湾崇拜」思想

の克服」が強調されている点も注目すべきであろう。

広東、福建両省を実地調査  
では実際に、中国大陸における台湾の影響はどのようなものであるか。かねてからの点を現地において確かめようと思つていた私は、この春休みに、中国沿海地方をつぶさに探訪することができた。その目的の一つは、近くわが国で翻訳刊行されるエスラ・ヴォーゲル教授の大著「一足先の中国」改革下の広東」の監訳者として、広東省、とくに珠江デルタ一帯の変化を改めて調べることであり、他の一つは、福建省における台湾との交流の現状や福州・廈門一帯の現場を視察することであった。

広東省は香港経済の強い影響下にますます改革開放のモデルと化しつつあるが、これを色にたとえればグレーが薄いブルーになったという段階であり、一方の福建省は農村がかなり豊かで、し



かも各地に媽祖廟なども多く残っていて、台湾の農村を想わせ、明るいオレンジ色でこれを抽象化することができよう。そのような福建省が台湾からの投資や台湾との経済交流を大いに期待していることは明らかである。

福州の南を流れる閩江の北はともかく、台湾語と同じ言葉が並ぶ閩南の泉州から廈門一帯にかけては、もはや、「台湾崇拜」思想」どころか、現地の住民が台湾の著しい経済的・社会的発展の実状を十分に承知していた。この点では、経済特区・廈門を中心とする福建省の開発は、まさに、台湾マター。だといえよう。

私は、廈門の対岸の鼓浪嶼の名勝、日光岩の頂上に立って、わずかに七〇先に見える金門小島を観光用の望遠鏡でのぞき、そこに「三民主義統一中国」という白地に赤の文字を確認して、さまざま感慨にとらわれた。台湾側が中国側の当面の台湾政策を十分に読みこんだ深い思慮によつて大陸との交流の政策を一步一歩実現しているならば、民主・自由・均富という、現代の三民主義」は、二十一世紀にこそ生きるのではなからうか。(なかじま・みねお)